



TITLE:

センター長挨拶(<特集>「第1回大学教育改革フォーラム:日本の大学教育をどうするか」の記録)

AUTHOR(S):

岡田, 渥美

CITATION:

岡田, 渥美. センター長挨拶(<特集>「第1回大学教育改革フォーラム:日本の大学教育をどうするか」の記録). 京都大学高等教育研究 1995, 1: 3-3

ISSUE DATE:

1995-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53471>

RIGHT:

センター長挨拶

岡田 渥美（京都大学高等教育教授システム
開発センター）

これから、京都大学高等教育教授システム開発センターの主催致します「第一回 大学教育改革フォーラム」を開かせていただきます。本日は、年度末の大層お忙しい最中にも拘らず、多数の方々にご参集いただきまして、まことに有り難うございます。衷心より御礼申し上げます。

申し遅れましたが、私、この少々舌を噛みそうな長い名称を持ちますセンターの、責任をお預かりしております岡田渥美でございます。僭越でございますが、このシンポジウムの司会・進行の役を取らせていただきますので、どうぞよろしくご協力のほどお願い申し上げます。

後ほど、議論の展開の中で、本センターの目的や基本性格などにつきまして、あるいは話題に上るかとも存じますが、まず始めに、このセンター設立の趣旨、また、今回のフォーラムを設定致しました趣意につきまして、私の方からごく簡単に申し上げたいと存じます。本センターは、平成6年度の政府予算の成立と同時に、昨年6月に国立大学として初めて、いわゆる大学教授法の研究開発という、これまで全く手つかずでございました未開拓の領域にチャレンジする学内共同の教育研究施設として発足いたしました。京都大学が、ほぼ三年半ほど前から、自らの教育改革という問題を組織や制度や財政といった外側からではなく、むしろ内側から、我々自身の日常の教育活動そのものから進めていく方途について真剣に模索しました結果、その「内からの改革」を促進してゆく拠点として構想されたのが、本センターでございます。

「大学」が——Eric Ashbyも強調いたしますように——研究活動と同時に教育活動をも、その第一義的な使命として誠実に担うべきであるとしますれば、“センター・オブ・エクセレンス”ということは、単に研究面のみならず教育の面においても、すなわち「人を育てる」ということに関しましても、当然考えられて然るべきことと存じます。

さて、それでは他ならぬ「大学」において、人を育てるとは一体どういうことでしょうか。端的に言いますれば、それは、過去、現在、未来にわたる人類社会の全体に対して、本当にレスポンスブルな人間を育成するということでありましょう。人類の命運に、本当に責任を負いうるような人を育てること、これで行いましょう。全人類のウェルフェア——国益など遙かに越えた「人類益」とでもいうべきもの——のために、それぞれの能力や個性や徳性を十分役立たせ得るような、そうした創造的な知性と批判的な判断力と国際的な洞察力と、そして何よりも、人間が真に人間らしく品位を持って共に生きることへの畏敬と憧憬と勇氣に裏づけられた強靱な意志力と使命感——こういった諸々の徳性を生き生きと身につけた本当に魅力あふれる人格を育成すること、このことこそが、大学教育の本来的任務ではないかと我々は考えております。

けだし、大学における研究がますます世界に向かって開かれたものでなければならないのと同じように、大学における人間の育成も、世界に向かって大きく開かれていなくてはなりません。とりわけ、現代人が直面しております「地球の破局」とともに「魂の破局」、geo-catastrophe と共に psycho-catastrophe という二重の危機のもとでは、全人類のために本当に開かれた人間の育成ということこそ、大学として全力をあげて背負わねばならない課題であろうかと存じております。まさに、そうした意味での「人を育てる」センター・オブ・エクセレンスたらんと志しを持ちまして、本センターは今、ここに産声を上げたばかりなのでございます。

もとより言うは易くして、道は遙かに遙かに険しいことを我々は重々自覚しております。つきましても、今後このセンターが健やかに育ってまいりますために、ぜひとも皆様方のお力をお借りいたしまして、様々な角度から、貴重なご意見、ご助言、ご教示を賜りたいと念願しまして、実は本日、このような場をしつらえた次第でございます。どうぞ、意のありますところをおくみ取り下さいまして、活発なご論議をいただきますよう、心からお願い申し上げます。

それでは、最初に本学の井村裕夫総長からご挨拶を頂きます。